

多くのチョウ愛好家が今でもウスバシロチョウという愛称を好むウスバアゲハは、外見上とてもアゲハ属には見えないが、分類学的にはアゲハチョウの仲間となるため、最近和名がウスバアゲハに変更された。

昆虫少年に名乗りを上げた小学校 5 年のとき、中学生となっていた次兄もチョウ採集に手を染めていて、仲間と出かけた高知市円行寺でウスバシロチョウをとらえて持ち帰り、三角紙に納められたきれいなチョウがグライダーのような飛び方をしていたと見せられたのが初めての出会いだ。何とかそのグライダー飛翔を目にしたいし、チョウそのものも標本として追加したいとの思いを募らせ、中学校の科学班メンバーとなって遠征した高知市鏡村小川口のレンゲ畑で初めてその優雅な飛翔を目の当たりにして感激。その後、大学 1 回生のときチョウ好きと分かって友好を深めることとなった地元京都在住の石田君が、ウスバシロチョウがたくさんいるところに案内するといって連れて行ってくれた滋賀県葛川梅ノ木というところで本種がまさに乱舞する光景を体験した。高知梶が森や鏡村小川口などで見たのは多くて 4.5 頭ていどで、生息地によっては本種が信じがたいほどの個体数をみることができると初めて知る。

社会人となって神戸市に住んだ頃、ベルギーとフランスの蝶友と標本交換を始めていて、高知で僻地教育に情熱を注いだ父が赴任する各地域で母が野山を駆け巡ってチョウを採集し、その交換用の高知産チョウを数多く送ってくれたが、香美郡物部村岡内に本種が多産することを知り、子供を連れて帰省した際に足をのぼして本種の乱舞を楽しむこともできた。チョウの探索種を定めることなく家族づれで訪ずれた兵庫波賀町や夢前町で偶然本種が多産地に遭遇し、何度か訪れてその群れとぶ様子をビデオ撮影もしたが、こうしたエッセイに添付採用できる画像がなかなかうまくえられない状況が続き、いつのまにか波賀町と夢前町、いずれの地でもチョウが激減し、それが異常繁殖したシカによる食草や吸蜜植物類の食害によることがわかって悲しくなる。そして 2014 年 5 月、波賀町音水溪谷にもはや本種の姿はなく、かろうじて夢前町のごく限られた荒れ地で寂しげに飛び遊ぶ本種に出会う。ツマキチョウの♀も飛ぶその荒れ地にみられるムラサキケマンは数えるほどで、観察できた本種はわずかに 3 個体。キツネノボタンらしき黄色い花からキイチゴの仲間の花へとフワフワという感じの飛翔で場所を変えながら蜜を求める個体に絞って



追いかけてまわし、自然吸蜜の様子をなんとか映像としてとらえたが、数少ない食草ムラサキケマンの状況からも、今後の生息維持がかなり心配。

